

2019 年度 教員相互の授業参観 報告書

目次

国際英語学科	国際英語専攻	p. 1
人文学科	日本文学専攻	p. 3
	歴史文化専攻	p. 5
国際社会学科	国際関係専攻	p. 7
	経済学専攻	p. 8
	社会学専攻	p. 9
	コミュニティ構想専攻	p. 10
心理・コミュニケーション学科	心理学専攻	p. 11
	コミュニケーション専攻	p. 14
人間科学科	言語科学専攻	p. 15
数理科学科	数学専攻	p. 16
	情報理学専攻	p. 18
総合教養科目運営委員会		p. 20
総合教養科目運営委員会		p. 21
キリスト教学科目運営委員会		p. 22
第一外国語運営委員会		p. 23
第二外国語運営委員会		p. 25
日本語科目運営委員会		p. 26
情報処理教育運営委員会		p. 27
教職課程運営委員会		p. 28
学芸員課程運営委員会		p. 29
日本語教員養成課程運営委員会		p. 31

2019 年度 教員相互の授業参観報告書

提出日

2020 年 2 月 25 日

国際英語・英語文学文化

学科・専攻

科目・専攻・委員会名

主任・委員長等責任者氏名

本合 陽 (国際英語) ・野村恵造 (英文)

授 業 科 目	英語文化リソース論 (新課程) / 英語学 (英語と文化) A (旧課程)	授 業 担 当 者	宇野沢 和子
授 業 参 観 実 施 日	7 月 1 0 日 (水) 3 時限	参 観 者 数	4 名 (内、非常勤講師 0 名)

(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)

①「文化」を明示的に標榜するこの授業において、「文化」という多義的な概念をどのように規定しているか、またどのような方法論を用いているかを知り、他の「文化」に関わる授業にも応用できるか探るため。

②次のようなコメントがあった。

- ・見学させていただいた学生のポスターセッションは、発表内容・分析がとても充実していて、これまでのクラスで宇野沢先生が充実したクラス運営をされている様子が伺えました。
- ・言語学のアプローチで広告比較などもされているということを知ることができ、斬新でした。
- ・FD 見学のすべてが学生のポスターセッションだったため、宇野沢先生がどのような講義をされているかは残念ながら今回の見学ではわかりませんでした。前半部分は宇野沢先生の講義を見せていただき、後半は学生の発表にするなどにわけていただけると、教員同士の勉強という意味ではよかったように思いました。
- ・クラスでは学年ごとにグループが分かれているようでしたので、相互の学びのため、学年混合グループもできると良いように感じました。
- ・授業開始直後はしばらく準備のために雑然としていて、なすべきことについての先生の指示が徹底していないのでは、と思ったが、実際にポスターセッションが始まると順調に進んだので、学生は授業形式の趣旨をきちんと理解していることが分かった。
- ・「楽しかった」で終わらせない工夫がなされており、しかも常に改善の方策を考えておられることに敬服する。
- ・この形式の授業をされる時はもう少し大きな教室に変更すれば、準備や学生の移動がよりスムーズになり、また、発表の聞き取りも容易になると思われる。

③本日の授業は、学生が様々な文化事象を自分なりにまとめ、ポスター発表を行うものでした。いくつかのポスター発表の説明を受けましたが、以下のような印象を持ちました。

「文化」を扱うために、自分が置かれている文化状況を客観的に見つめる必要があると思いますが、そのためには比較という方法論が有用であると思われます。学生は多く、比較という手法を持ち込み、自分の置かれている文化のディスコースと、別のディスコースを比較することで、双方の文化の特徴を理解しようとしている印象がありました。すなわち、宇野沢先生がそのあたりをしっかりと授業で教えていらっしゃるのであろうと考えることができます。

また、「文化リソース」という意味で言えば、映画、広告、政治家のことば遣い、大衆文化など、様々な題材を学生が問題にしているところから、授業で扱う内容の幅の広さが想像できます。

さらに、ポスター発表という方法論が、文化を捉え、要約し表現し、不特定の聴衆だが個別に説明するという一連の行為が、文化という題材を扱う際、他にも応用できる可能性を教えて頂くことができました。

先生の話はほとんどなかったのですが、こういった講義をされるのかを伺うことはできませんでしたが、学生が活き活きと発表をしている様子がとても印象的で、良い授業であるという印象を持ちました。

④授業参観では、ポスターセッションの授業を見ていただいた。ポスターセッションはアクティブ・ラーニングの一環として、毎学期行っている。ポスターセッションとは、発表者がポスターを作成し、それを壁にはり、発表者がその前に立ち発表をする形式をさし、一度に複数の発表を行う。学生は授業で扱ったテーマに関連して、英語文化リソースを選び、英語と文化に関して発表をしなければならない。学生の満足度は高く、アンケートを実施したところ、90%以上の学生が「面白かった」「楽しい」と答えている。その理由として、同じテーマを選んでも、分析者によって分析が異なる点を挙げている。学生が自発的にテーマに取り組むことを目指しているが、今回も熱心にポスターを作成し、いい発表が多かった。ポスターセッションの利点として挙げられるのは、クラス全体が聴衆の伝統的発表形式と比べ、緊張の度合いが少なく、聴衆と自由に質疑応答ができる点である。

当日は、良かった発表について学生に書いてもらったが、そうすることによって、聴衆としても積極的に発表を聞いてもらうためである。

ポスターセッションのほかの利点として、学生数が多くても実施できる点が挙げられる。今学期の履修者は約50人だったが、クラスを二グループに分け、交代で、発表してもらった。

また、講師の方で、全ての学生の発表を聞くのは無理なので、ポスターと一緒に発表要旨を提出してもらっている。本当は全ての発表を聞いて、質問をしたいところなので残念である。

学生の人数が多くても、ポスターセッションが実施できると述べたが、さすがにあまり多いとうまく授業運営ができない。昨年の英語学（英語と文化）Bでは、履修人数が約70人だったので、クラスを3グループにしたところ、第三グループの発表では、発表を聞いている人が少なかった。学生の発表が終わると、「スマートフォンを見ている学生がいる」という指摘があったので、最近は、スマートフォンの使用を禁止している。また今回のポスターセッションで難点だったのが、教室の狭さだ。今回は初めて6105教室で講義をしているが、机や椅子の配置を変えても、ぎりぎり発表ができる空間しかできなかったのも、このような物理的制約がある。また発表によっては、聞き手がいない学生も毎回いるので、残念だという学生の指摘もあった。これは、学会発表の時に人気のない発表と同じだといえる。

学生にとってポスターセッションの参加は、半分の学生が、以前「英語学(英語と文化)B」でポスターセッションを経験しているので、うまくいったようである。授業では、過去のポスターを紹介している。教育効果を考慮に入れると、利点が多い発表形式のため、今後も続けていきたい。

2019年度 教員相互の授業参観報告書

提出日

2019年 7月 17日

科目・専攻・委員会名

日本文学 専攻

主任・委員長等責任者氏名

今井 久代

授業科目	人文学基礎演習	授業担当者	今井久代・近藤裕子・山本真吾
授業参観実施日	7月3日(水) 1時限	参観者数	4名 (内、非常勤講師 1名)

①授業科目の選定理由

新課程の高大接続・アクティブラーニングをめざす授業として新たに設置した科目であるが、どのような授業形態としてゆくのが最も効果的であるのかについて、意見を交換し、授業内容をブラッシュアップすること方々、教員同士のアクティブラーニング型授業のスキルについて、向上を図るため。

②参観者の意見

学生がよく調べてきており、学生からの意見もなかなか有効なものが出てきていて、活発な授業になっていた。パワーポイントを使つての発表のクラスもあったとのことであるが、パワーポイントでのプレゼンを学ばせる授業というのであれば、そのように位置づけて、プレゼンスキルを評価し、指導するのが良いのではないかと。

教員の補助的な発言はもう少し減らして、学生同士が生で意見交換する時間を増やす方が良い。

教員のコメントやまとめが入ることで、学生の知識を増やすという部分もあった。

教員が最初にDVDを見せて、その見所について説明する時間をもつという講義時間が、学生の理解の助けになり、大変有効であった(外部公開以外の授業)。

④担当者の意見

後半は、学生の発表をとっかかりにクラス全体で議論してゆく形であるが、クラスごと、班ごとでどのような発表が最初になされるかでその日のクラス全体の雰囲気が変わる。その意味で、クラスがもともと持っていた性格にもかなり左右される。そこがこの種の授業の面白さであると同時に難しさである。

また、前半は「その場で議論してゆく」ことをまず第一の目標としたが、ある程度の知識や理解があつてこそ議論が深まるというところもある。その工夫をどうするかが必要。授業の目的としては、後半の学生発表につながる議論が前半でできるようにというのが目標であったが、その連携についても工夫があつても良いかも。特に後半においてどのような発表にしてゆくかについて、授業全体の半ばでまた全体で集まり、そこでレポートの書き方かたがた、発表する、調べる、考える、について説明する方式(第1回と第7回で全体会を行う)が良かったかも知れない。

その際に、レジュメの書き方、枚数等指示すると良かったか。パワーポイントは文学の発表には必ずしも向かないので、パワーポイントを不要としても良かったかも知れない。

後半のグループ発表では、近代文学では学生発表の前に教員が映像を見せて講義し、全体として共有すべき知識を補った。古典文学では、学生が調べてきたことをもとに教員の方から質問したり話しを補うなどした。議論を深めるためには、発表グループ以外もこの議題についてある程度の知識をもつことが必要であるのだが、事前に渡されたプリントだけでは不十分なようで、発表グループ以外も読んでくるとは限らない(教室外学習の不足)ので、そこをどう補い、またその必要性をどう学生に自覚させるかも大事かと思う。そのために途中からwebクラスでその点を補おうとしたが、全体に浸透させるに至らなかった。簡単な小テストを出すなどして、必然的に読ませるというのも良いかも知れない。

以下のように、担当分野ごとにやや学ばせる内容について目標に違いがあつた。必ずしもすべてを同じにすることは求めず、それぞれの分野ごとの学問傾向に添いながら、補いあって日本文学全体を学ぶ授業

にしてゆきたい。

結局学んでもらいたいことは、自分たちの常識を疑う、ものごとを相対的にみる目ではないかと痛感する。いまここでは当たり前だと思っていることが、そうではないという想像力こそが、人文学(日本文学)で学ぶべきことなのではないか。また文脈に置くことで意味がいかに関わるかを考えさせたい(古典)

議論の仕方を学ばせることに力点を置いた。自分の問題として考えること、あえて反対側(自分がすぐに思い付く方向とは違う意見)から考えてみること、などである。それを文学作品に置いてみるときは、作品自体から考えたり、社会的文脈から考えたり、いろいろやり方があることも示した(近現代文学)

調べないでまず考えてみる、次に用例などを調べて考えてみる、調べてことばについて改めて考えるということを大切にしたい(日本語学)

2019年度 教員相互の授業参観報告書

提出日 20年1月吉日

科目・専攻・委員会名 歴史文化専攻

主任・委員長等責任者氏名 高田陽介（歴史文化専攻主任）

授業科目	3年次特殊演習（史学）	授業担当者	坂下史
授業参観実施日	1月14日（火曜）5時限	参観者数	1名 （内、非常勤講師0名）

（①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。）

①当該科目は、卒論の具体的な作業に取り掛かるための前提となる諸条件を、3年次後期終了時点で整えさせるための卒論準備演習であり、史学専攻で長年実施してきた必修科目である。卒論へ取り組む構えを確立してゆく重要な助走と位置づけて、その単位取得を4年次への進級条件として課してきた。そのため、設置7クラスで課題の種類や分量、報告のさせ方などにつき、できるだけ共通化を進め、史学専攻カリキュラムを代表する科目であった。しかし、改組後の歴史文化専攻18カリキュラムではもはやこの科目を設置しておらず、長年この科目で蓄積・整備してきた卒論準備の諸要項を、18カリキュラムの3年次後期演習で具体的にどのように継承するかが、歴史文化専攻での課題となっている。カリキュラムにひときわ精通した担当者によるこの科目の最終回での諸要項の「まとめ」を共有し、20年度の歴史文化専攻18カリキュラム3年次後期演習の運営に生かしたい。この「3年次特殊演習」を通常形態（再履修者向けの独自開講ではない）で開講する最後の年度であり、また、18カリキュラムでの初めての3年次学生が学ぶ20年度を目前に控えた今年度に、18カリキュラムの3年次後期演習での卒論準備指導の盛り込みについて具体的な手がかりを確保すべく、最終回の「まとめ」を通じて、この演習の実施方法、授業の工夫などについて確認する機会としたい。

②史学専攻の3年次後期の特殊演習7クラスは、内容を卒論準備に特化し、専攻の専任教員全員がクラスを分担している。4年次への進級条件科目としているため、7クラスで可能な限り、課題の種類・量や報告のさせ方などを共通化しているが、日本史と外国史、前近代史と近現代史といった領域ごとの研究・教育状況などの違いも無視できないため、専攻内で合意されている共通化内容をどこまで具体化できるかは、必ずしも容易な問題ではない。今回の参観授業からも、当該クラス担当教員が、共通化された諸条件をたいへん忠実に具体化していることが、あらためて知られ、また、その共通化された水準への到達に苦しむ学生に対する担当教員の懇切な対処ぶりには、参観者自身が反省を迫られるものがあった。

当日報告を予定していた学生2名のうち、1名は、次年度に取り組む卒論のテーマとして、北アイルランドにおける紛争の歴史的な解明を構想しており、これに向けた準備作業として、(1)勝田俊輔氏「近世アイルランド（アルスタ）の殖民都市—「市場」と「文明」—」（都市史学会編『都市史研究』第5巻所収、山川出版社、18年）と(2)松井清氏「北アイルランド紛争における「宗教」の位置」（慶応義塾大学法学研究会『法学研究—法律・政治・社会』77-1、04年）を取り上げ、概要を報告するとともに、自身の問題関心を構成する上でとくに(2)論文を知ったことが重要な転機となったことを、明快に説明していた。担当教員からは、孤立しがちな少数派に事態の原因を負わせるのではない理解の枠組みへの展望について、報告学生の認識を確かめようとしていた。

担当教員は、報告の題材となった研究論文について、タイトルや所在データといった書誌情報の確認を行ない、先行研究データを収集する際に取得すべき基礎項目について、あらためて注意を喚起していた。また、論文で論拠とされている史料の性格や所在、議論の組み立てにともなって作成・提示されている資料（図版や表など）の意義に関して、補足的な解説を加えつつも、参加学生の発言をたくみに促していた。

- ③このクラスは、3年次の通常の演習として西洋近世史ゼミに所属する学生たち、および、同中世史ゼミに所属する学生たちの一部をメンバーに、合同クラスとして編成されているが、担当教員の積極的な授業運営を通じて、ヨーロッパ史への歴史的探求を試みる仲間どうしの親密さと信頼感が十分に醸成され、相互の発言がよく引き出されていた。この特殊演習クラスは、歴史学の学術論文として自らの卒論を作成してゆくための助走を促すものであり、授業のようすからは、論文に取り組む上での諸作法（先行研究データの収集・整理の仕方、文献の引用の仕方、諸データの表記の仕方、注の付け方など）の習得という観点から、担当教員による適切な助言や説明が、これまでの授業の積み重ねの中ですでに懇切に実施されていることが窺われた。また担当教員は、学生が報告素材とした専門的研究論文について、議論の構成（各論点の相互関係など、全体の論旨の組み立て方）についても合わせて解説を行っていた。この特殊演習の趣旨を踏まえ、専攻での内容共通化に沿った形で、模範的な演習運営が遂行されていた、と考える。
- ④卒論への助走となる具体的な諸作業を確認し、それらを新たなカリキュラムの中でどこにどのように盛り込むかが、専攻にとって今後の課題となる。

2019 年度 教員相互の授業参観報告書

提出日 2019 年 10 月 7 日

科目・専攻・委員会名 国際関係専攻

主任・委員長等責任者氏名 轟 莉莉

授 業 科 目	アメリカ研究（社会史）II	授 業 担 当 者	小檜山 ルイ
授業参観実施日	10 月 3 日（木） 1 時限	参 観 者 数	4 名 (内、非常勤講師 名)

（①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。）

「ジェンダーの視点からアメリカ史を理解する」、「大きな歴史の流れは女性の人生をどのように規定してきたか」などの視点を提示するこの授業は、他地域多領域の研究者としての教員の参考となると思われるので、この授業を選定しました。

授業参観は 4 名でした。参観者からは、アメリカの女性運動と時代背景に関する歴史認識や、考察する問題と歴史的背景との関連性の提示法、デジタル映像とペーパー資料との結合、教員による説明と学生への質問との結合の授業法、各週の授業内容の連続性とテーマの区分など、様々な角度から感想が寄せられました。全員が一致したのは、「授業参観をして勉強となった」という意見でした。特に若手教員は、「教育と研究の経験が豊かな小檜山先生の授業は自分にとって啓発的である」と言いました。

2019年度 教員相互の授業参観報告書

提出日 2020 年 3 月 16 日

科目・専攻・委員会名 国際社会学科経済学専攻

主任・委員長等責任者氏名 二村 真理子

授 業 科 目	中小企業論	授 業 担 当 者	穴山 悌三 先生
授業参観実施 日	10 月 10 日 (木) 5 時限	参 観 者 数	4 名 (内、非常勤講師 0 名)
<p>(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)</p> <p>①授業科目の選定理由 穴山先生は長く企業にお勤めの後、大学教員の職に就かれた実務家である。また、これまでも大学において教鞭をとった経験も豊富で教育にも長けており、どのような工夫がなされているのか学ぶため。また、アクティブラーニングを取り入れた講義であるため、参考になると考えたため。</p> <p>②参加者の意見 内容は「ビジネス・ゲーム」(1グループ5～6人の学生がバンカー、大企業、中小企業に分かれて投資をして競うもの。)であった。あらかじめ、前の週にゲームの説明を行っていたものの欠席者がいたことで、軌道に乗るまで時間がかかっていた。参加者の意見としては「少し複雑なので一度では理解できなかったのかもしれない。」「交渉をするプロセスでいろいろと学んだことがありそうだ。」「私もおなじようなことをやっている。」「難しそうだ。」などの意見が出ていた。</p> <p>③主任・委員長の意見 学生は授業で学習した内容を活かして実際に模擬投資をすることで、中小企業の経営の難しさを実感していたようだ。少し、ゲームの仮定に無理があるのではないかと授業内容に対して疑問に思うところもあったが、学生が生き生きと奨めていく様子を見てこのような授業形態も面白いと思った。</p> <p>④担当者の意見 授業の前半は、なかなかゲームが進まなかったことを反省されていた。ただ、学生のコメントとして、利益がなかなか出ないこと、中小企業の経営が難しいことを実感できたとの反応があったとご連絡をいただいた。</p> <p>⑤その他 前の週に休んだ学生を授業に参加させるのが難しそうだった。また、人数が足りないグループに参観者の教員が急遽参加したが、やはりルールが難しく感じた。</p>			

2019 年度 教員相互の授業参観報告書

提出日 2020 年 3 月 5 日

科目・専攻・委員会名 国際社会学科 社会学専攻

主任・委員長等責任者氏名 主任 金野 美奈子

授 業 科 目	社会調査実習 I	授 業 担 当 者	上野 加代子先生
授業参観実施日	10 月 29 日 (火) 4 時限	参 観 者 数	<u> 3 </u> 名 (内、非常勤講師 <u> 0 </u> 名)

(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)

①授業科目の選定理由

本科目は 3 年次必修で、専攻教員全員が毎年担当している科目である。専攻教員にとっては、相互の授業の実際を学び、自らの授業に活かせるヒントを得るよい機会となる。実習形式の科目であることから、一般的にも、アクティブラーニング授業の事例として公開する意義があるものと考えた。

②参加者の意見

参観授業では新たな福祉サービスの立ち上げを企画している企業との協働により、高齢者および学生に対してニーズ調査を行った結果が報告された。社会貢献の意味をもつ調査を実習として実施するよい例であった、担当教員が積極的に関わり学生の視野を広げる工夫をしている点が参考になった、などの意見が出された。

③主任の意見

本実習のテーマや実施する調査の方法・対象の決定は、各授業担当者の裁量に任されており、毎年様々な試みが行われている。今回の参観実施授業では、企業との協働という形で、より積極的に社会と関わる中で調査を企画・実施するという試みが紹介され、専攻教員にとって大変よい参考となったと思われる。

④担当者の意見

社会調査実習Ⅱの授業参観当日は、(1)前期から実施してきた「アプリを用いた高齢者外出サポートサービス」の調査の目的・内容・考察・結果を、報告書(暫定版)をもとに受講生全員が分担して発表し、(2)参加教員から講評と質問、アドバイスを受け、それに学生が答える形で進化した。本授業参観は、学生にとっては自分達が実施した調査の報告をシェアする機会となり、調査と報告書を間に合わせるために、夏休みに調査や自主ゼミなどの授業外学習を促進することになった。また参加教員との質疑応答により諸課題が明確になり、一つの調査研究を成し遂げることの難しさも実感できたように思う。授業担当者にとっては授業参観をひとつのゴールに掲げることができたため、調査の進行が容易となり、そして今後、社会調査実習の授業を進めるうえでのいくつかの課題をいただいた。

2019 年度 教員相互の授業参観報告書

提出日

2019 年 12 月 26 日

コミュニティ構想 学科・専攻

科目・専攻・委員会名

主任・委員長等責任者氏名

伊奈 正人

授 業 科 目	2 年次演習（コミュニティ構想）	授 業 担 当 者	矢ヶ崎 紀子
授業参観実施日	1 月 7 日（火） 5 時限	参 観 者 数	8 名 (内、非常勤 3 名)

（①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。）

①当該科目は、専攻の選択必修科目であり、担当教員は実践的教育の核となる教員として、本学に着任された。PBL を取り入れた観光学の授業の試みとして、「旅行商品の開発」というプロジェクトを実践した成果であり、広く学内で共有すべきと思った。

②当該時間帯は他の授業が重なっており、出席が難しい教員が多かったので、ビデオ撮影してそれを見る形での参加となった。結果について、常勤教育職員 4 名、オフィス職員 1 名、非常勤講師 3 名で検討会を行った。各演習、拠点実習などの成果が持ち寄られ、プロジェクト型の授業の意義、ノウハウなどが議論された。

学生が、調査したり、あるいは実習をしったりする場合に、自分で交渉し、企画していくことが重要であることが再確認された。苦労も多いが、それによって「学生は見違えたようになる」との指摘があり、何人かの学生の学習成果が共有された。

成果報告会や、報告書づくりその他での学生動員について、アルバイトとしての雇用が不可能なのかということについて意見交換があった。他方で、実践的研究計画法は学びのプロジェクトの授業であることが確認され、そうした学生を動員してゆく可能性について議論が行われた。

③プロジェクトやイベント、調査などの企画実践するための事務手続きの困難などが確認された。参観者のなかに事務職員もおられた。今後情報交換をすすめ、教育を拡充することの重要性が確認された。そういう意味では、参観いただいたことは意義深いと思われる。上記アルバイトの問題以外にも、実習の集中講義的な要素（国連での授業などのようなかたち）の導入とノルマの問題などの懸案もある。

④学生が自主的に個別に計画して、実習先とのおつきあいができ、そしてそれが学年をこえてつながってゆくことの重要性が強調された。協定などは、そうしたものの積み重ねの上に可能なら位置づけられるものであり、協定が先に来て、そこに学生が動員されるようなかたちは回避されるべきだということが、検討会で強調され、全員で確認された。

2019年度 教員相互の授業参観報告書

提出日

2019年 12月 4日

心理・コミュニケーション学科・心理学専攻

科目・専攻・委員会名

主任・委員長等責任者氏名

森田慎一郎

授業科目	学習・言語心理学	授業担当者	上野泰治
授業参観実施日	11月14日(木)4時限	参観者数	6名 (内、非常勤講師0名)
<p>(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)</p> <p>①授業科目の選定理由 教育内容が規定されている公認心理師科目の教え方について学ぶ。</p> <p>②参加者の意見 全体 ・きわめて専門的で難しい内容と、分かりやすい具体的例を挙げての説明が緩急おりまぜて紹介されるため、集中を無理なく続けられ、理解を深めながら受講できた。 ・一方的に知識を教えられるという印象ではなく、いろんなことを先生のお話を聴きながら思考を広げていけるため、結果として主体的な学びができたと思われる。 ・教員・研究者目線で見ると、とても興味深いトピックだった。たいへん勉強になった。</p> <p>話し方 ・先生の声や説明もクリアで、とてもわかりやすい授業だった。 ・話し方にめりはりがあり、また、話すスピードも適切で聞きやすかった。</p> <p>資料 ・パワーポイントをつかったスライドも、小さい部分を拡大するという工夫をされて、見やすかった。自分の授業でも、こうした工夫を取り入れたい。</p> <p>課題 ・事前に学生が提出した課題の内容を講義に取り入れており、学生が興味を持てるように工夫されている。 ・宿題を事前に確認していた点がとてもよい。 ・宿題(時間外学習)の活用についても参考になった。</p> <p>内容 ・受講生の身近な関心に引き寄せ、縦横無尽に進められる授業におおいに刺激を受けた。 ・自由記述データの分析という、学生が自分たちの研究に取り入れようと思っけていてもなかなか手を出しにくい分析手法について、授業の中で実例を挙げながら説明していたため、この分析に対する学生たちのハードルが確実に下がったと思われる。結果の読み取り方についても丁寧に教えられていて、大変わかりやすかった。授業の半ば(学生の集中力が切れる頃)に、学生たちが実際に回答したデータについて分析結果を提示したのは非常に効果的な方法だと思われる。</p>			

発展学習

- ・さらに学習を進めたいと思っている学生への適切な情報提供が参考になった。
- ・学生が教室外学習をしやすいように、テキストマイニングソフトのフリーソフトウェアの紹介や QR コードなどを入れている点もよかった。
- ・QR コードを載せているので、学生が復習する際にウェブページを確認しやすく、よい方法だと思った。

その他

- ・KH コーダーの例で扱われていた「高齢者向けサービスのニーズ調査」というテーマが学生の興味からは若干離れたテーマのように感じたので、同様の手法を用いた心理学の研究例をいくつか紹介していただくと、学生が自分たちの研究で自由記述データを分析する場面を思い浮かべやすくなったかもしれない。
- ・自由記述の分析は、そのまま臨床の調査に使えないところもあるかもしれないが、「一度やってみたい」「学生にやらせてみたい」という気持ちにさせられ、勉強になった。
- ・学生目線で見ると、「学習・言語心理学」という全体の中でどのような位置づけになるのか、冒頭で説明があるとよいかと感じた。
- ・今回のトピックは言語心理学の主要トピックの「関連領域」だと思うが、主要トピックとどう関連するかを説明すると学生としてはわかりやすいと思った。たとえば、共起性は乳児が言語獲得する際にも統計学習されていると思うので、そのあたりとの接点を示す手もあるかもしれないと思った。

③主任の意見

- ・公認心理師科目は、ややもすれば、知識を紹介することで手一杯になってしまう科目であるが、学生の興味関心を引き出しながら、必要事項を説明していく方法はたいへん勉強になった。
- ・授業内容の質の高さはもちろんであるが、眠たそうにしている学生に対して授業への集中を促したり、携帯をいじっている学生に注意をしたりするなど、学生の受講態度にも注意を向けておられることも、授業の水準を高めることに寄与していると思われた。
- ・いろいろな意味で、たいへん刺激的な授業をご提供いただいたことに、感謝申し上げます。

④担当者の意見

まじめで向学心の高い学生が多い専攻において、学生達のそういった意識・姿勢を保つために尽力してこられた先生方からの温かいお言葉は、大きな励みとなりました。同時に、もっとこうしたら良い、といったご要望をもっともって頂けるくらい、インスピレーションの沸く授業を目指すべきとの思いにも駆られました。良い意味で、もっと頑張りたいと思わせて頂く機会となりました。御礼を申し上げます。

言語心理学の主要テーマ(共起性と言語学習)との関連は、思いついておりませんでした。後日、乳児の統計学習を教える回にて是非とも言及したいと思います。学生達にとっても、過去の授業回を振り返り、かつ、その授業回を理解するための良い機会となりそうです。

分析に使用するデータのテーマについても、その通りだと思われました。心理学の学生に馴染みがあるようなテーマで、かつ、今回のようにソフトの紹介に適したデータ(分析結果がわかり易いデータ)が手に入るように今後努力したいと思います。

臨床の調査にそのまま使えないかもしれないというご指摘については、その日に学生から集めたコメントでも触れられていたことでした。翌週、学生にもフィードバックさせてもらいましたが、やはり、人の目で確認し、ソフトが把握しきれないところを補足するというステップは必要になると思います。また、単語の組み合わせをどう解釈するかについても、人の手(解釈)が入ってきますので、そこに臨床の先生方、学生の人達が大事にしてこられた視点が入って来る必要があると思います。そのうえで、膨大なデータの一次処理として KH コーダーを扱い、そこから漏れそうなものを臨床的観点から読み解き、補っていくというステップは、KH コーダーの発展という意味でもソフト側の利点がありますし、膨大なデータにおいて、まずどこに着眼したらよいかという指針をもらえるという意味で、臨床の先生方にとっても利点があるとも想像しております。そういう意味で、お互いにとって Win-win となるようにも思われます。

最後に、人の仕事をとってかわるため(効率性)や、人造人間を作るため(シンギュラリティ)といった目的のために AI を発展させる AI 研究者もいますが、多くの研究者はそうではなく、人を理解するために AI 研

究をしていると思われます。私もその一人で、今回の AI に関する授業参観はまさに、AI が臨床の研究にどう使えるかといった議論・コメントを通じて、人の心について理解しなおす機会になったと思われます。貴重な機会を頂戴し、御礼申し上げます。

2019 年度 教員相互の授業参観報告書

提出日	2019 年 7 月 17 日
科目・専攻・委員会名	心理・コミュニケーション学科 コミュニケーション専攻
主任・委員長等責任者氏名	斉藤 慎一

授 業 科 目	日本語教育研究概論 I	授 業 担 当 者	松尾 慎
授業参観実施日	7 月 12 日 (金) 5 時限	参 観 者 数	4 名 (内、非常勤講師 0 名)
<p>(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)</p> <p>①授業科目の選定理由：本専攻の「異文化コミュニケーション」「多文化コミュニケーション」領域のなかでも外国語としての日本語、日本語教育についての知見を全学的に共有し、それぞれの専門領域との関連性やつながりについて検討し学際性を深めることが期待されるため。</p> <p>② 実施後の参観者の意見：学生が主体となり日本語初級内容の模擬授業をする試みは、大変勉強になりました。事前に出された 3 つの課題 (1. 「うれしい」と「たのしい」の違い、2. 「ね」と「よ」の使い分け、3. 「学ぶ」、「習う」、「勉強する」の使い分け) に対して、学生ペア・グループが主体的に日本語初級程度の生徒を想定した模擬授業を行うクラスでした。</p> <p>当日は日本語学校の教員ならびに生徒を招待し、各発表ペア・グループの模擬授業に対してコメントやアドバイスをするなど、相互交流も取り入れられていました。</p> <p>同時に、日本語教育を専門とする石井氏、そして先輩学生ならびに受講学生が各発表に対して非常に活発なコメントを加えており、日本語教育を改善させようという意識がクラス全体で共有されていました。</p> <p>参観者の専門である「多文化コミュニケーション」の視点から見ても、日本語教育の授業を通して、言語の背後にある文化も同時に学んでいることが伝わり、日本語の重要性ならびに奥深さを感じることでできた授業でした。</p> <p>③主任の意見：専攻の 3 領域のひとつである多文化コミュニケーションに関わる「外国語としての日本語」「日本語教育」授業は、教員養成だけでなく文化、言語、共生を学ぶ良い機会となる。また教員やゲストと学生の対話/討論に基づく双方向の授業が行われており、本専攻の学びのスタイルとしての定着が望まれる。</p> <p>④担当者の意見：今回の授業は学生の発表が主体となるものであった。4名の教員に参観していただき、更にビジターとして日本語学校の教員、学生も参加する中の発表であったため授業にいい意味の緊張感が加わったように思う。</p> <p>参観した教員それぞれから学生発表へのコメントをいただき、学生にとって大きな学びの機会となった。最後に参観者より多文化コミュニケーションの観点からのコメントがあり、授業に参加した者すべてに新たな視点をもたらしてくれたと思う。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>			

2019 年度 教員相互の授業参観報告書

提出日

2019 年 7 月 17 日

言語科学 学科・専攻

科目・専攻・委員会名

主任・委員長等責任者氏名

松尾 慎

授 業 科 目	日本語教育研究概論 I	授 業 担 当 者	松尾 慎
授業参観実施日	7 月 12 日 (金) 5 時限	参 観 者 数	4 名 (内、非常勤講師 1 名)
<p>(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)</p> <p>① 講義授業でありつつ学生主体の発表形式を取り入れている本授業のあり方を専攻の教員を中心に共有し意見交換をするために本授業を選定した。</p> <p>② 参観者として 日本語教育の授業参観は初めてなので、他と比較することはできないが、独特のやり方であると感じた。授業の形式、教員の立ち位置、クラス全体の巻き込み方、など大いに参考になった。 内容としては、①「うれしい」と「たのしい」(2組)、「習う」「勉強する」「学ぶ」(1組)、③「ね」「よ」(2組)の使い方について、それぞれのペアが行う発表を聞き、その内容や出来を比較・分析等をしつつ学ぶという形の授業であった。発表が終わるごとに聞いていた学生達に隣同士で発表の内容をディスカッションさせる、その上で、学生と教員のコメンテーターがそれぞれの発表内容についてコメントをし、最後に担当教員がまとめを行うという形式で進められていた。 進め方にメリハリがあるので、学生達は眠くもならず活気がある。終始、自分たちも参加している意識が持ち続けられる。また、ピア・ラーニングの良さをよく活かしている。 全体の印象としては、まず、発表をする学生達の態度や発話がしっかりしており、学習者に適宜呼びかけたり問いかけたりしながら進めている点も好印象であった。また、授業全体の構成として、いくつかの例を比較検討するための具体的な素材(教え方の実践例そのもの)も学習者自身に提供させていて、それをコメントしながら進めている点が優れていると思った。この授業を通して、実践的に日本語の教え方の基礎やその魅力を学べるのは履修者にとってとても良い刺激になることだろう。参観者の他の授業でも応用したい。</p> <p>③ 人数の多いクラスでありながら、学生主体の発表形式を取り入れている授業のあり方を授業参観者で共有することができた。</p> <p>④ 今回の授業は学生の発表が主体となるものであった。4名の教員に参観していただき、ビジターとして日本語学校の教員、学生も参加する中の発表であったため授業にいい意味の緊張感が加わったように思う。参観した日本語教育を専門とする教員から学生発表へのコメントをいただき、学生にとって大きな学びの機会となった。また、最後に参観した教員より多文化コミュニケーションの観点からのコメントがあり、授業に参加した者すべてに新たな視点をもたらしてくれたと思う。</p>			

2019 年度 教員相互の授業参観報告書

提出日

2019 年 11 月 18 日

科目・専攻・委員会名

数理科学科 数学専攻

主任・委員長等責任者氏名

大阿久俊則

授 業 科 目	確率統計Ⅱ	授 業 担 当 者	竹内 敦司
授業参観実施日	11 月 6 日 (水) 1 時限	参 観 者 数	_____ 5 名 (内、非常勤講師 _____ 0 名)

授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。

①授業科目の選定理由

2 年次の選択必修科目であり、確率統計分野の基礎となる授業である。他分野の教員も基礎的な選択必修科目を担当する際の問題意識を共有するため。

②参観者の意見

(1) 内容に無駄がなく説明もわかりやすいと思いました。教員が大変落ち着いて授業を進めていて、学生も熱心に聴講している様子で、授業の雰囲気も良かったと思います。ただ、もうすこし強弱をはっきり付けた方が今の学生には伝わりやすいかもしれないとも思いました。たとえば、学生が複雑な公式などをすべて覚えるのは困難だと思いますので、試験に対応するには何を理解し何を覚えておけばよいのか、さらに将来的には何をしっかり覚えておけばよいのか端的に指摘することがあってもよいと感じました。

(2) あらかじめ縦に線を引いて黒板を分けてから板書をしていたのは、学生にとって見やすくノートも取り易いと思いました。複雑な数式もきちんと縦線と縦線の間に見やすく板書していたのには感心しました。また、板書は丁寧で教室の後方からも良く見えました。ただ、黒板の下端は後方の席からはやや見にくいので、上方のスペースを有効活用するとさらに見やすくなると思いました。

(3) 板書では教科書の対応する箇所をその都度明示するなど、教科書を学生が有効に活用できるよう配慮していると思いました。教科書にたくさん付箋を貼って復習に役立てていると思われる学生もいました。

(4) 次回の授業で今までの授業内容についての演習を行うことが予告されていましたが、統計学はデータを用いた実際の作業を経験しないと十分理解できないと思われるので、このような機会を設けることは教育的だと思いました。

(5) 履修者のほとんどは数学専攻の学生ですが、確率統計は他の科目との関連も深く、情報理学専攻の学生にも履修して欲しいと思いました。

③主任の意見

本科目は前期の確率統計Ⅰと合わせて確率統計分野の基礎となる科目であり、数学専攻 2 年生の多くが履修します。確率統計学は、他分野、特に解析学との関連が深く、同じく 2 年次向け選択必修科目の解析学概論Ⅰ、Ⅱで教えている偏微分や重積分が必要となります。しかし重積分については(2 年生にとっては)本授業と同時進行の解析学概論Ⅱで扱うため、予備知識として仮定することができません。そのため確率分布の計算など重積分が必要になる部分についてどのように教えるかについては、担当者の工夫が求められます。

今回授業参観を行った回の授業では、比較的高度な確率分布を扱い、結果の証明には重積分の複雑な計算を要するため、今回はとりあえず結果のみを説明して次回に予定している問題演習でその実際の使い方

に習熟させるという方針のようでした。これは学生の理解を考えると大変適切だと考えます。(なお、既に授業で扱っているもっと基本的な確率分布については、④にあるように学生の既知の知識と結びつけて説明されたとのことで、大変教育的だと考えます。) また逆に、重積分などの解析学の事項については、あらかじめ確率統計においてどのように使われるのかを体得することで、勉強の動機付けになると考えます。

本科目に限らず 2 年次選択必修科目は学科専攻の教育の中で重要な位置を占めているため、どのような内容をどのように教えているのか、その一端を授業参観で直接体験することは、科目間の連携について再検討するなど、学科の教員にとって貴重な機会となると考えます。

④担当者の意見

今日は参観日ということもあり、学生たちも緊張感を持って授業に臨んでくれたように思います。前回そして今回の授業の中で、重積分の話が色々なところで登場してきました。何とかこれまで知っている話から結び付けようと思い、対応してみましたが、それが学生たちにどのように伝わったかは何とも言えません。この授業に限らず、他の確率統計関係の担当講義の中でも、数学の色々な話(例: 行列の固有値、多変数関数の極値問題、ヒルベルト空間など)との関連について、紹介しています。学生たちの知的な好奇心、科学的探究心に少しでも刺激を与えることができると願っています。

⑤その他

授業参観についてのコメント等に関しては、学科全体のメーリングリストでやりとりを行い、上に述べた以外にも更に数学的な内容に踏み込んだ意見交換もなされました。これは担当者と参観者だけでなく参観できなかった教員にとっても有意義であったと思われます。

2019 年度 教員相互の授業参観報告書

提出日 2019 年 11 月 25 日

科目・専攻・委員会名 数理科学科・情報理学専攻

主任・委員長等責任者氏名 安藤耕司

授 業 科 目	数理モデルとシミュレーション AII	授 業 担 当 者	荻田武史
授業参観実施日	11 月 12 日 (火) 3 時限	参 観 者 数	<u> 3 </u> 名 (内、非常勤講師 <u> 0 </u> 名)

(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)

① 授業科目の選定理由

・18 課程ではシミュレーション科目が A～D に拡大され選択必修となるので、科目間の連携等を考える上で、本科目の内容と授業法を共有することは有意義である。また、本年度から 4306 実習室に導入された新システムの活用例を見ることも有益であると期待できる。

② 参観者の意見

・講義スライドには文章と数式だけでなく図や絵が豊富にあり、学生が学びやすいよう配慮されていると感じました。スライドでの説明とプログラミングの演習を 2 題という構成でしたが、演習に十分な時間が割かれていてゆったりと課題に取り組めるのは大変よいと思いました。また、プログラミングの演習はこれまでの授業で作成してきたコードを変更することで新しいプログラムを作るというスタイルで、学生にとって取り組みやすいものになっていたように思います。時間内に最後までできた学生は少なかったようにみえましたが、多くの学生は黙々と演習に取り組んでいたのが印象的でした。

・シミュレーションの面白さの一つは、モデルにいろいろな数値を入れて作ったグラフや動画が、実際の現象をうまく表したり、意外な結果が見られたりするところにあると思います。学生が自分でやる内容に加えて、学生が自分でやるのは難しいけれども、学んでいることの発展形としてこんなこともできるといった、見た目面白い事例、それから実際の応用例を紹介して、シミュレーションに対する関心を高めてもらうのもよいと思いました。また、シミュレーション結果を、モデルの改善にどうつなげていくかを考えるのもよいと思いました。

・シミュレーションのテーマを別の科目(たとえば生態学など)に出てくる内容と関連付けるなど、科目間の連携ができるとよいと思いました。

③ 主任・委員長等の意見

・ホームページからアクセスできる講義スライドが大変充実していて、「これを読んで自分で実習を進めなさい」と言って半ば放任しても十分なのではないかと思うほどでした。ただ、今日の課題の 2 次元熱伝導方程式の場合は、境界条件の実装の仕方が若干難しいと私も感じました。そのため、少し時間が経ってから答えをその場で与えておりましたが、これもスライドにヒントを少し補充することで、もう少し自力で考えられるようになってくるのではないかと思います。

・私は MATLAB を使うのはほぼ初めてだったので、IDE(統合開発環境)が良くできていて、かつ荻田先生の入門スライドも実践的でわかりやすかったので、すぐに自分も実習に取り組むことが出来ました。面倒な宣言文の類がなくても、関数に配列を渡すだけで簡単に 3D グラフが表示され、動画にするのも容易なものには驚きました。学生のデスクトップが教員席のモニターに表示され、遠隔で指導が出来る機能にも

感心しました。

④ 担当者の意見

- ・講義用のスライドについては、学生が復習する際にも使用できて有用であり、授業内容の性質上、学生にはノートを取ることも説明を聞きながら実習に取り組んで欲しいので、このスタイルを続けていくのが良いと思っています。
- ・授業参観で頂いたコメントから、学生が理解しづらい場所については、スライドをわかりやすく改良していくことが今後も必要であると感じました。
- ・また、社会におけるシミュレーションの実例を見せることによって、講義内容が実社会でどのように役立つのか、そういった動機付けについても示していきたいと思いました。

⑤ その他

- ・授業参観についてのコメント等に関しては、学科全体のメーリングリストで意見交換しました。これにより、参観できなかった教員にとっても有意義な情報が提供されたと思います。

2019 年度 教員相互の授業参観報告書

2020年 3月 11

提出日 日

科目・専攻・委員会名

総合教養科目運営 委員会

主任・委員長等責任者氏名

光延 真哉

授 業 科 目	総合教養演習（女性の生きる力）	授 業 担 当 者	橋谷 能理子
授業参観実施日	12月 5日（木） 2時限	参 観 者 数	3名 (内、非常勤講師____名)

(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)

- ① 本学が特徴とする女性学を扱った「女性の生きる力」領域に属し、かつ演習科目であるため。
- ②・疑問を持ったならネットで検索してわかった気にならず、現地へ行ってみることに、聞くこと、体験することの大切さが力説され、学生にとってとても大切な授業をされていると感じた。30人ほどの受講生であったが、もっと多くの学生に是非聞いてもらいたい授業であった。
- 先生ご自身が現役のテレビキャスターということもあり、特にマスコミ関係の仕事を目指している学生には、これとない貴重な内容の話であった。身近な例と写真を多用し、話しかけるような口調で、時には人生訓や御経験にもとづいた学生へのメッセージもさりげなくあり、履修生達も食い入るように聞いていた姿が印象的であった。「女性の生きる力」という科目名にとっても相応しい内容であった。授業だけに留めておくのではなく、講演会のようなものに発展させると、より多くの学生の興味を引けるのではないかと。
 - 報道番組の制作過程やキャスターの仕事だけではなく、取材対象の国や地域、その歴史ならびに現代の国際社会の問題にも話題を広げ、掘り下げられた授業であった。それらは女性のキャリア形成にも深く関わるものであり、履修生は自分の将来を見つめる内容であったと思われる。その意味において、総合教養科目としてとても適切な内容の授業であるという印象を持った。
- ③ 演習科目ではあるが、参観回は教員の話が中心となる講義の形式が取られていた。このことについて、参観者からは、学生に話し合ってもらったり意見を言ってもらったりする時間を短時間でも設けるとアクティブラーニング的な要素も強まったのではないかと、という意見もあった。演習科目である以上、やはりそうした要素は他の講義科目よりも強める必要があるであろう。
- ただし、一般論として、この授業のように教員の話そのものに魅力がある場合には、アクティブラーニングの要素を取り入れることで、いたずらに貴重な時間が削られてしまうことが惜しいようにも思われる。昨今はアクティブラーニングであることがことさら重視される傾向があるが、そうでなくても魅力的な授業は十分に成り立ち得るという事実が改めて認識される。そして、アクティブラーニングの要素が今後さらに求められていくのであれば、従来の90分の授業時間でそれが可能なかどうかという観点での検討も、合わせて行なわれるべきではないかと思われる。
- ④ 学生が退屈しないよう、10～15分ごとにトピックを変えたり、ワークやDVD鑑賞をはさんだりしている。一方的に話すより、学生を巻きこんで作り上げることを意識している。

2019 年度 教員相互の授業参観報告書

提出日 2020年 3月 11日

科目・専攻・委員会名 総合教養科目運営 委員会

主任・委員長等責任者氏名 光延 真哉

授 業 科 目	現代の家族とジェンダー	授 業 担 当 者	中川 まり
授業参観実施日	11月29日(金) 4時限	参 観 者 数	3名 (内、非常勤講師____名)
<p>(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)</p> <p>① 本学が特徴とする女性学を扱った「女性の生きる力」領域に属する科目であるとともに、大人数の授業で Webclass をどのように活用するのかを参考にするため。</p> <p>②・履修者リストから任意に指名してコメントを求めたり、質問をしたりするという工夫は、いつ当てられるか分からないので緊張感をもって講義を聴くようになることが期待される。特に、基礎概念を理解しているか質問して確認していたことは重要であると思った。</p> <p>・大教室の授業であるが、学生を指名して発言を求めるなどのインターアクションがあり、適度な緊張感を保つのに寄与していたと思われる。授業の第二部(30分程度)は教員が与えたテーマに関する議論のために使われていた。メリハリがあつてよさそうであつたが、後方で特に参加する様子もなく過ごしている学生もそれなりの数がいた。近くの学生同士での議論を促していたが、他の学生から離れて着席している学生がわりといた。議論の際は TA や SA の活用があるとよいのかもしれない。</p> <p>④ 講義途中で学生を指名して、発言を促し、授業に関心を向けるようにしている。重要なことは、パワーポイントのスライドに記載していても、改めて板書することで学生の関心を集めるようにしている。</p>			

2019年度 教員相互の授業参観報告書

提出日 2019年 11月 25日

科目・専攻・委員会名 キリスト教学科目運営委員会

主任・委員長等責任者氏名 遠藤勝信

授業科目	キリスト教学 II 世界のキリスト教	授業担当者	矢田洋子
授業参観実施日	11月 18日(月) 2時限	参観者数	2名 (内、非常勤講師____名)

(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)

- ①本授業を担当する矢田洋子先生(専任講師)は本学着任1年目であるが、他校での非常勤講師のご経験もおありである。矢田先生のクラスを参観し、意見を述べ合う中で、お互いにより良いクラス運営のための知恵が得られると期待したことが、その選定理由である。
- ②説明が丁寧で分かりやすく、話す速度も適切であった。レジュメとパワーポイントを効果的に用いていた。後ろの席の学生のためにスクリーンの字はもう少し大きい方が見やすい。ポインターはどこを指しているか分かりづらかった。縦長の教室で、学生達が後ろの席に固まって座っている傾向が見られたので、学生が授業に集中するために、もう少し前に座るように促しても良い。遅刻者のチェックが必要であると感じた。総合的に、よく準備されて授業構成が整っており、興味深い内容であった。
- ③講義は、明確な構成のもと、また十分かつ興味深い内容で適切に行われていた。講義者の話し方も、程よいスピードと音量で、とても聞き易かった。当日配布されたレジュメはA4が1枚(裏表印刷)で、講義内容を導くための年表、及び資料が適切に纏められていた。学生が講義内容を理解し、記憶に留め易くするためにはもう少し情報があっても良いとも思われた。授業進行にはパワーポイントも併用されて効果的であったが、後方に着席した学生には文字が小さめである。スライドを指し示すポインターも小さく動きも速いため、その点の工夫が必要である。学生たちの応答の様子としては、前方に座った学生(20名程)は顔を上げて興味深く聴いていたが、後方に座った学生(20名程)は殆ど下を向いていた。遅刻者(30分、50分)が多かった点も今後注意を喚起する必要がある。全体としてよく準備され、キリスト教学IIの講義としての質と内容を備えた良い講義であったと思う。
- ④初年度の授業参観ということについて、言われた当初は二年目以降がよかったのにとこの思いがあった。しかし、本学新任の講師の個性を大切にしながらよりよい授業を目指すには、本学の同分野の先生の授業を参観をする前というこの時期設定がいいと考えられたのだろうと実感し、感謝している。大教室での授業でどのようにすれば学生と「一緒に」授業を立てていけるのかを模索する中、今回のアドバイスだけでなく、参観していただけた先生方には今後も具体的に相談しやすくなったので、非常によい機会だった。授業参観日には学生の側がいつもと違ってしまわないかと危惧したが、学生側は慣れているのか全くそのようなことはなかった。

2019年度 教員相互の授業参観報告書

提出日 2019年 12月 10日

科目・専攻・委員会名 第一外国語 委員会

委員長 塩原 佳世乃

主任・委員長等責任者氏名 (授業参観担当 田中 美保子)

授 業 科 目	Reading IB	授 業 担 当 者	鶴田 知佳子
授業参観実施日	11月 25日 (月) 2時限	参 観 者 数	6名 (ビデオ参観者を含む) (内、非常勤講師 3名)

① 授業科目の選定理由

学生と教員とのインタラクションの機会が比較的多く、主に英語で行われている本授業の参観を通して、学生主体の授業のあり方や様々な効果的な教室内活動の方法について意見を交わしたり授業の工夫を共有したりする目的で選定した。

② 実施後の参観者の意見

- ・同じ教科書を使っている先生が、どのように授業を展開されているのか、とても興味深く拝見させていただきました。教科書の解答確認、全て個人で行っておられました。全員で答えを言わせるとクラスの理解度を確認できると思いました (声が小さいところは自信がないなど)。学生とやり取りをしながら進められているのが、とても印象的でした。メールやフライヤーのコピーは学生に刺激的で良いと思いました!

- ・-advanced class であれば、英語での授業が意味あるものになりうると思いました。
- 教員が学生の間を回って当てていくのがテンポが良くていいと思いました。
- 参加型のクラスのため (少し人数は多いが…) 円型に座れるとお互いの声もよく聞こえて良いのではないか? と思いました。

- ・鶴田先生がウォームアップのために選ばれた香港の話題が時事的で面白く、近くに座っていた学生さんたちも積極的に話をしていました。さらに、当日担当の学生さんが、各自選んだ新聞記事の紹介と意見の発表をしましたが、発表によく考えた準備のあとがうかがえ、聞いている学生さんたちも関心を持って聞いている姿が印象的でした。テキストについては、先生が書いておられましたように、上級レベルの学生さんたちにとってはかなり易しいと感じられました。ただ、先生が資料を豊富に配っていらっしゃる、また授業中の各自の発表があるため、まとまった文章を読むトレーニングはそちらで補われているのだと思いました。授業中に聞いて話して読み、課題を書くというバランスのよい授業が、大変参考になりました。先生の通訳のご経験を、授業を通してつねに受け取ることができる学生さんたちが幸せだと思います。

③ 主任・委員長等の意見

非常に学ぶところの多い授業で、この授業を公開していただき参観できたことは大いに意味があると実

感した。以下の1～6に挙げる様々な工夫に満ちており、履修者が真剣に集中して学んでいるのが印象的であった。

1. 英語で通している。

終始一貫して担当者が英語で授業を行うことで、学生たちも英語で話し発表することを守っているところがまず大いに参考になった。英語で話しなさい、と言っても教員が日本語を混ぜて使えば学生は日本語になってきてしまう。この点を改めなくてはならないと日頃の自らの態度を反省した。また、英語で通すことにより、履修者たちの集中力も増していると思った。

2. テンポが良くサクサク進む。どんどん指して発言させている。

学生が退屈したり眠ったりしている時間を与えないスピードとぐいぐい引っ張っていく指導力、90分減退しない活力など、大いに刺激を受けた。教師は生き活きしてはいけないことを改めて実感した！

3. 担当者の立ち位置が履修者に近い。

教壇上や教室の前にじっと立っているのではなく、終始、当てて発言させるときに、その学生のすぐそばに歩み寄り、発言を促したり助けたりしている。学生と一緒に考えている姿勢を実感させてとても良い。

4. 四技能を伸ばすための工夫がある。

教員側からトピック提供するだけではなく、英字新聞の記事を選んできて発表させていることにより、テキストに載っている英文の分量が少な過ぎるように思ったが、それを補うだけではなく、学生にとってスピーキングやプレゼンテーションの練習にもなっているのもとても良い。

5. 担当者が実際に関わっている具体的な類例をテキストに沿って補助教材として用いている。Conference information、e-mailのやりとりなど、担当者が実際に関わった具体的な類例を示すことにより、テキストの内容理解をさらに助けているばかりか、学習内容に対し学習者に親近感を持たせることができている。

6. 実際の生活に必要な情報や、その練習の機会も提供している。e-mailの文面のポライトネス、disclaimerへの注意喚起や、レッスンの最後に課した writing assignment: invitation to an event なども、テキストに従うだけではなく、履修者にとって実生活でもすぐに役に立つ内容で書かせてみることで、大学での学びを実生活に結びつけているところもとても良いと思った。

④ 担当者の意見

通訳者でもある担当者が大学でリーディングの授業を担当するのは今回が初めての経験である。特に意識しているのは、リーディングとはいえ、英語の総合力を楽しみながら高めるためには、四技能を使えるよう工夫をして点である。そのために、重要部分は必要なら最低限日本語で確認するが、英語で授業を進めている。英語力を身に着けるためには、なるべく多く楽しいと思うような形で英語にふれることと考え、今回のUNIT 8（全体スケジュールでの今日のレッスンの位置を参照）PLANでは、担当教員が参加予定であった国際会議、やりとりのメール、執筆したエッセイを追加のリーディングの資料として配布している。全部英語で進めることに担当者は不自由がないし、学生たちも過不足なくついてこられていると思う。やればできるように思う。これが気を許して一言でも日本語を発するとどっと崩れる。英語で話すと決めたら、「あの先生、日本語がわからない」くらいの勢いで英語のみで通すほうがよい。

動画は共有していただいてまったく構わない。拙ない授業ながら何かご参考になれば幸いである。

⑤ その他

・非常勤講師の方も含め、いつもよりも多くの方が参観に来られて実施した甲斐があった。英語による授業に対する関心が高いことをうかがわせるものであった。

・そのことは、参加者のアンケートに寄せられた以下の文面からもわかる。「今回、月曜日の2限に授業を担当している先生方から、講師室で参観について聞かれましたのでお話ししました。時間があえげばぜひ参加したいと思っていらっしゃった方が多いようです。当日動画を撮っておられたので、もし公開が可能であれば、個人的に見て参考にしたいと思う方は多いように思います。」

・鶴田先生がおっしゃるとおり、教科書のレベルがこのクラスにはやや易しいように思う。このような教科書についての情報は、次年度に向けて是非共有したい。

2019 年度 教員相互の授業参観報告書

提出日

2019 年 11 月 15 日

科目・専攻・委員会名

第二外国語運営委員会

主任・委員長等責任者氏名

尾尻 希和

授 業 科 目	中国語初級	授 業 担 当 者	下出 鉄男
授業参観実施日	11 月 1 日 (金) 5 時限	参 観 者 数	3 名 (内、非常勤講師 2 名)
<p>(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)</p> <p>①第二外国語では言語ごとに順番で参観科目を充てており、今年度は中国語であるため。</p> <p>②金曜日の 5 限という時間帯にもかかわらず、私語や居眠り等がほとんど見られず、熱心に授業を受けている学生が多かったのが印象的でした。先生はテキストの内容を補足するプリント教材を用いて、テキストだけではわかりにくい複雑な文法事項を豊富な用例を挙げて説明されており、中国語をあまり知らない参観者にとっても大変わかりやすかったです。自分自身の授業運営をするうえで非常に参考になりました。</p> <p>③本学の教育に長年携わってこられたベテラン教員の授業ということで、参観者にとって大変意義深い参観となった。初級クラスはどちらかというと「仕方なく」受講している学生が多い印象であるため苦労も多いが、当該授業は学習意欲を刺激しつつわかりやすい授業のモデルであると思われる。</p> <p>④当該クラスはたまたま非常に熱心な学生が集まっているという印象をもっている。すでに当該授業のテキストを使い始めてから年数を重ねており、プリントの準備などもこれまでの経験の蓄積が活かされていると考える。今後も学生のやる気を引き出す工夫を重ねていきたい。</p>			

2019年度 教員相互の授業参観報告書

提出日 2019年6月5日

科目・専攻・委員会名 日本語科目運営委員会

主任・委員長等責任者氏名 熊谷 智子

授 業 科 目	日本語表現法	授 業 担 当 者	桑子 敏雄
授業参観実施日	6月4日(火) 2時限	参 観 者 数	<u>2</u> 名 (内、非常勤講師 <u>0</u> 名)

(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)

- ①グループワークをもとに「日本語力向上心得集」を作成するという試みが興味深く、他の教員も参考になる点が多いと考えられる。
- ②・7名ずつの3グループに分かれてグループワークを行う形態を取っている。指導者の長年の経験から、多様性があり、かつまとめることのできる人数として、7名がベストであるという結論を得たとのことで、大変参考になる。
- ・模造紙にポストイットを貼り付けるというローテク(KJ法)と、全員がPCを持ってきて、Onedriveでファイルを共有しつつ全員で作り上げていく作業を行うというハイテクの両方を用いており、様々な手法に習熟できる授業になっていると感じた。
 - ・指導者が一つずつ教え、それを実践する形ではなく、学生が自ら情報を集めて考えることを重視しており、指導者は個々の発表の際などに的確な助言をする方式をとっている。自主性を重んじた授業であると感じた。
 - ・拝見した範囲では、各グループの中で、中心になる人物が決まっており、全員の力を同等に伸ばすのは、やはり難しいと感じた。自主性に任せると、各人に同じチャンスを与えるのは難しい。社会に出れば、当然と言えば、無理に苦手なことをやらせる必要もないと思うので、この辺りの配分は難しいと感じる。
- ③日本語科目は、半期の授業だけで日本語力の充実を完結するものでなく、その後の生活の中でも力を伸ばしていく方法の習得を目的としている。本授業は、受講者各々が自分の望む日本語力を意識し、具体的な向上方法をグループワークを通して考え、発表するという、まさに科目の目的に適った実践の一つであると感じた。10クラスが多分に固定的な共通のシラバス・最終課題で運営されてきた「日本語表現法」であるが、今後の多様化の可能性を模索する一つのきっかけともなり得る。
- ④授業参観をしていただき、感謝します。この授業形態で感じていることは、学生が自分の多様な表現力を向上させたいという意欲をもっていることです。学生たちはインターネット、SNS等で日々進化する表現空間のなかで自己を磨くことに喜びを感じていると思います。教員の役目は、その意欲を伸ばしながら、他者とのコミュニケーションによって自己の表現レベルを知り、改善してゆくのを手助けすることであると思い、このような形態の授業にしております。東京女子大生(1年生)は、そのような能力を十分に備えているという認識もっております。

2019年度 教員相互の授業参観報告書

提出日 2019年 12月 27日

科目・専攻・委員会名 情報処理教育運営委員会

主任・委員長等責任者氏名 加藤由花

授業科目	情報処理技法 (Java プログラミング) II	授業担当者	中鉢欣秀
授業参観実施日	12月 6日 (金) 4時限	参観者数	<u>2</u> 名 (内、非常勤講師 <u>0</u> 名)

(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)

① 授業科目の選定理由

プログラミングの授業の新しい教授方法 (モブプログラミング、ペアプログラミング) を教員間で共有するため。

② 参観者の意見

モブプログラミングにより、学生たちが力を合わせて1つの課題に取り組むことで、互いに理解が進み、また楽しんで学んでいるように感じた。教員としても、学生が声に出して試行錯誤をすることで、学生の理解の度合いを把握することができ、有意義である。一方、発言がほとんどない学生もいたようで、プログラムの書き手としての参加はしていたが、そういう学生にも発言させて試行錯誤に参加させるにはどのようにすべきか、という課題も存在すると感じた。

③ 主任・委員長の意見

プログラミングだけでなく、演習の比重が大きい情報処理科目の教授法として学ぶべき点が多々あり、多くの教員に参観してもらいたい授業であった。教員として、学生の理解度を再認識した授業であった。

④ 担当者の意見

プログラミングの授業にペア・プログラミング (二人でペアになりプログラムを作成する)、モブ・プログラミング (複数人で一つのプログラムを作成する) を導入し、学生のアクティブ・ラーニングを促す工夫をしている。従来のプログラミングの授業では、教員が文法事項を説明し、学生は課題などでプログラミングを学ぶ受身的な学習スタイルがメインであるが、本授業で取り入れている方法であれば学生が主体的に学習することが期待でき、また、講義を聞くだけの授業よりも積極的に学生が学ぶように仕向けることができる。課題として、ペア・プログラミングでは、プログラミングに自身がない学生がペアの相手に迷惑をかけないだろうかと不安に思うという点や、モブ・プログラミングでは発言が声の大きい学生に偏るといった点などがあり、今後の改善を探る必要はある。なお、学生から授業後に提出してもらった感想コメントには「分かりやすかった」「みんなの意見が参考になる」「説明が分かりやすかった」などの肯定的な意見が多く、大きな手応えを感じている。

2019 年度 教員相互の授業参観報告書

提出日

2020 年 1 月

科目・専攻・委員会名

教職課程運営委員会

主任・委員長等責任者氏名

教職課程運営委員長 大家まゆみ

授 業 科 目	道徳教育の理論と方法	授 業 担 当 者	飯高 晶子
授業参観実施日	11 月 7 日 (木) 3 時限	参 観 者 数	3 名 (内、非常勤講師 1 名)
<p>(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)</p> <p>① 文部科学省の新学習指導要領の改訂に伴い、小学校では平成 30 年度から、中学校では令和元年度から「特別の教科 道徳」(道徳科)が始まった。本授業を公開することにより、教科としての道徳教育のあり方について改めて検討するために選定した。</p> <p>② 問題提供に始まり、理論を一通りおさえることで考えのベースを作り、討論や体験的な活動へつなげてゆく授業構成は、多面的な考え方を導くうえで有効だと感じた。だが、現代における文化や価値観の変化の中で、普遍的な道徳的価値というものをどのように伝えていくのが難しいと感じた</p> <p>③ 「道徳を教えることは可能か否か」との発問に対し、(1) 各自の考えをワークシートに書かせる→(2) グループ討議→(3) 数名に発表させ全体で共有、との手順を進めた点は、教員からの一方的な講義形式ではない授業方法として参考になった。しかし、学生の座っている位置が教室全体に分散していたので、(3) での発言者は前列付近にいる学生に限られてしまった。たとえば、教室の何列目より前に着席することのように席指定をすれば、全員が発言の機会を得ることができ、より良い授業展開になったのではないだろうか。</p> <p>④ 全 2 時間の 1 時間目の授業であった。1 時間目の前半は理論的な内容とし、1 時間目の後半と 2 時間目は実践的な内容を予定して授業を実施した。文部科学省の新学習指導要領に伴い、道徳が教科化されるにあたり、学生には「大学時代であるからこそ、道徳を教えることについて、自分なりに考察して欲しい」と考えての構成であった。しかし、参加者の教員 3 名から指摘されたように、授業の構成内容等には伝わりにくさがあった。教員相互の授業参観の後で、参加した教員 3 名と共に検討を行った際に、多くの参考になる意見をいただいた。今後の授業展開に生かしていきたいと思う。</p>			

2019 年度 教員相互の授業参観報告書

提出日 2019 年 7 月 26 日

科目・専攻・委員会名 学芸員課程運営 委員会

主任・委員長等責任者氏名 委員長 高橋 修

授 業 科 目	博物館概論	授 業 担 当 者	竹内久顕
授業参観実施日	7 月 5 日 (金) 2 時限	参 観 者 数	<u>3</u> 名 (内、非常勤講師 <u>1</u> 名)

(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)

①授業科目の選定理由

- 本科目は学芸員課程履修プログラムにおいて基礎的内容の授業として位置づけられ、学芸員課程履修の初年度の必修科目である。
- 昨年度は実習形式の授業を参観科目としたことから、今年度は講義形式である本授業を選定することとした。講義形式の授業は学芸員課程の必修科目の8割を占めることから、同形式の授業について教員相互で意見交換をすることは、学芸員課程科目全体における授業内容の点検・今後の改善にあたり、有益であると判断された。

②参観者の意見

【当日の授業内容】

- 当日の授業は「博物館の事例検討」の一環として、平和博物館と戦争（軍事）博物館を主題として取り上げ、具体的事例を提示しながらそれぞれの博物館の特質を紹介する内容であった。近年、博物館界では、戦争・公害・差別・貧困などいわゆる「負の歴史」をテーマとした博物館に注目が集まっている現状にあり、その意味で現代博物館界の最前線の問題を扱った授業内容といえる。

【参観者から出された意見】

- 講義内容をまとめたレジュメを授業冒頭で配布することで、学生の授業理解の手助けとなるよう配慮がなされていた。
- レジュメはA4版1枚片面印刷で内容が簡潔にまとめられ、学生にとってもふりかえりがし易いように配慮がなされていた
- 授業内容に関係する新聞記事、専門書からの論文コピーを配布することで、授業内容と現実社会の動向とを関連づけて思考できるよう配慮がなされていた。また、資料を配布するタイミングも関連トピックを取り扱う直前とし、資料と授業内容をリンクさせながら聴講できるよう配慮がなされていた。
- 授業担当者が学生に対して一方向的な授業とならないように、適宜、学生に問いかけをし、双方向的な授業となるよう配慮がなされていた。

③委員長の意見

- 一般的に講義形式の授業は情報伝達が一方向になりがちで、学生達にとって受け身がちとなる傾向にある。本授業にあっては、適宜、学生達から発言を求めるよう語り掛け、単に授業内容を聴くだけでなく、自発的に考える機会を設けていた。また、それは授業で扱う用語・事象に対する学生の理解度の確認の

機会ともなっていることから、学生にとって、授業内容を十分に把握しながら受講し得たものと考えられる。学生達の反応が熱心であったことからこのことは裏付けられる。

- 博物館をとりまく社会状況は急速に変化しているため、新聞等の活用は時宜を得たものといえる。授業の内容を活用・応用しながら現代社会で起きている事象を読み解く思考力が求められるので、その意味においても配布資料の工夫は今後、授業改善にあたり重要なテーマといえる。

④担当者の意見

- 本学の授業全体の課題の一つとして、学生の課外授業時間数の少なさが挙げられる。自発的な課外学習を促すために、授業内で採り上げた博物館に関する各種広報（パンフレット・DVD等）を紹介し、実際に足を運んでもらうきっかけとしている。また、授業内では適宜、本学図書館に架蔵されている参考文献を紹介し、自主学習のための手がかりとなるよう工夫を行っている。
- 講義形式の授業は学生にとって受け身になりがちとなり、また、集中力も途切れ易い。そのため、積極的に問いかけ、発言を促すように努めている。授業をとおして伝えなかったことは、平和博物館の意義とは「フォーラムとしてのミュージアム」「論争の場」という点である。戦争という「負の歴史」を巡って様々な意見が提起されているからこそ、授業の内容を踏まえながら平和博物館を利活用し、自分独自の意見・考えを持つことを学生達には期待したい。
- 以前、学芸員課程履修学生と教職課程履修学生から希望者を募り、明治大学構内にある「明治大学平和教育登戸研究所資料館」を見学したことがあった。授業担当者の竹内が両課程の授業を担当しているため、博学連携の実践的学習の一環として行ったものであった。今年度は、複数の平和博物館の事例紹介を授業内で行ったものの、授業担当者の都合で見学することができなかった。授業で学習したことを実際の博物館で検証し、また学芸員と教職を目指す学生相互の交流を通じた学習の深化を図るためにも、今後は計画的に準備を進めたい。

2019 年度 教員相互の授業参観報告書

提出日

2020 年 2 月 26 日

科目・専攻・委員会名

日本語教育学概論
日本語教員養成課程運営委員会

主任・委員長等責任者氏名

石井 恵理子

授 業 科 目	日本語教育研究概論 I	授 業 担 当 者	松尾 慎
授業参観実施日	7 月 12 日 (金) 5 時限	参 観 者 数	3 名 (内、非常勤講師 名)

(①授業科目の選定理由、実施後の②参観者の意見、③主任・委員長等の意見、④担当者の意見、⑤その他、自由にご記入ください。①～④は必ずご記入ください。)

- ①日本語教員養成課程の最初の授業であり、3年次授業を引き継ぐ者として、また課程の委員長として、学生の状況や、授業の内容・方法について具体的に知る機会であるため。
- ②教員からの一方向の授業ではなく、課題についてグループで考えたことの学生の発表や、発表に対する意見交換など、学生自身の着目点を知ることができていた。また、学生だけでなく、授業参観者からも意見をもらうなど、他者の発表に対して、遠慮せずに自分の意見や改善点などを発言する様子が見られ、ともすると遠慮してしまうことの多い学生達が、意見を言い合うことのできる関係作りがうまくできていた。学生同士の学び合いや学びを主体的に深める工夫が見られ、授業の工夫のヒントが得られる授業であった。
- ③2年次の授業内容として、教材や授業準備、授業の中でのやりとり等について、学生が具体的な説明の仕方を実践的に考える機会を得ることができる工夫があった。また、教師からのアドバイスだけでなく、学生同士で改善点を出すことで、教わることを待つのではなく、自分で見つけていくこと、また違う考えや選択肢があることを知ることの重要性を知ることができる。これは、日本語教員養成課程という、教師として授業を作っていく立場に立ちうる人材を育てる課程の科目として、重要な点である。初年次からそうした目標立てが意識されている。
- ④授業名が「概論」となっているが講義のみの授業とはならないよう毎授業でグループ活動、発表、全体共有を行っている。それは「教わる」だけでは、学習者に「関わる」、「教える」ことができるようにはならないと思われるからである。そうした授業のあり方を、日本語教員養成課程をともに担当している教員と共有できたことは意義があったと思う。